

JCAW

Japan Commerce Association of Washington, D.C., Inc.

ワシントンDC日本商工会会報
号外 ~ Vol.16 ~

会報別冊

ワシントンの映画好きによる「ルー」連載 「ワシントンで気ままに映画 を語ろう」 Part 3

- 第25回 (花より団子)
- 第26回 (Star Noodle)
- 第27回 (Dream Watcher)
- 第28回 (ワインとシャンパンとブライアン)
- 第29回 (No carrot, my life)
- 第30回 (ボヘミアン)
- 第31回 (チャンチータ)
- 第32回 (メッセンジャー)
- 第33回 最終回 (渡り鳥)

本稿は2013年12月号から2015年7・8月合併号までの会報に掲載されたものをまとめたもので、内容は掲載当時のものであることをご了承ください。

JCAW Copyright © 2015 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第25回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

花より団子

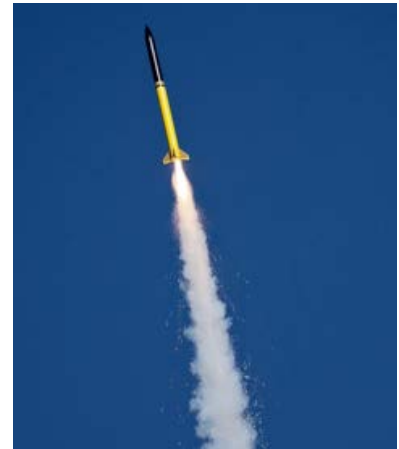
木枯らしの冷たさが身にしみる季節になりましたが、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。急激な気温の変化で同僚にも風邪で寝込む人が続出。このコラムでも同様な類が発生したかは不明ですが、たまたま参加させて頂いたハッピーアワーにおいて、このコラムの過去執筆者達にやり込められ(流れ弾に当たったとしか思えない)、このコラムを突如書くことになりました。そんなわけで、時間が許せば駄文にお付き合い下さい。そして皆様、どの飲み会に会員の刺客が潜んでいるかわからないので、これから続く忘年会、新年会シーズン、くれぐれもご注意を(笑)。

さて、先月のフラメンコさんから与えられたお題、『夢』。今回は、寝ているときに見る夢、ではなく人生の中で叶えたい夢、をキーワードに話を進めたいと思います。

夢を叶える系映画は数多くありますが、中でもこの時期、このワシントンという地を勘案して「October Sky(邦題:遠い空の向こうに<1999年>)」から口火を切ろうと思います。先月Virginiaでも人工衛星の打ち上げが行われていましたが、この映画はまさにロケットの打ち上げに熱を上げた少年達の実話。ロケットを打ち上げることを夢見た少年を通じて、夢を見ること、そして諦めないこと、年末の忙しさに追われているそこのあなたに、勇気をくれる(ときに反省を促す)映画です。

この映画は、1957年10月4日、旧ソ連(現ロシア)が打ち上げた人類初の人工衛星を見上げた日から始まります。冷戦の時代。まさにアメリカとソ連の意地の張り合い、もとい、威信と覇権を賭けた宇宙開発競争が行われ、ソ連が出し抜いた瞬間、そしてその後の宇宙開発競争と続くわけですが、この映画にはそんな難しい話はありません。もちろん、主人公ホームー、その家族、街が直面している問題を通じて、こうしたマクロの影響を垣間見ることができるわけですが。

主人公ホームーの街はWest Virginiaにある小さな炭鉱の町です。まさに3月号でご紹介があった「フラガール」のアメリカ版の状況です。炭坑は縮小傾向。でも、当時のこの街では、アメフトで奨学金を貰い大学に行くこと以外は、炭坑夫になるしかないと思われていました。こうした時代背景の中、人工衛星が夜の星空を駆け抜ける姿に感動した高校生ホームー、ロケットを打ち上げることを決意し、友達4人と何度も失敗しながらロケットを作り続けます。周りには、夢を追い求めていいのだと後押ししてくれる愛らしい素敵な先生や、おもしろそうだと部品を作ってくれる炭坑の人、もちろん、全員が背中を押してくれるわけではありません。ありがちな家族のしがらみなど、彼が色んな困難にぶつかりながらも見上げた空に、一本の長い煙と共に打ちあがるロケット、やっぱりなんだか胸が熱くなるのです。



*イメージ。ロケットが真っ直ぐ飛ぶことの難しさ…は映画をごらんあれ。著作者:jurveston
<http://free-images.gatag.net/>

—— 余談ですが、このホーマー、その後NASAのエンジニアとしてスペースシャトル 打ち上げに関わります。そこで出会った日本人宇宙飛行士、土井氏に、ホーマーたちが作ったロケットの部品、全米科学コンテスト優勝メダルを宇宙に持っていってくれと頼んだとか。

—— さらに余談ですが、漫画の世界でも同様のお話が存在します。まさに最近映画にもなった「宇宙兄弟」、ご存知の方も多いと思います。この漫画でも、まさに夢を追いかける主人公を通じて、様々な訪れる試練を通じて、泣かされる事請け合い。そして様々な困難にぶつかりながらも前を向く主人公、支えてくれる家族や友人たちに、やっぱり胸が熱くなるのです。私の友人Aは、会社の新入研修の必読書とし提示しようかと申したいです。

DCはNASAの本部があったり、スミソニアンで航空宇宙博物館があったりと、宇宙の存在に触れる機会が多い街です。ぜひ、上記二つ、(もはや一つは映画ではないが)チェックしてみてください。

さて、もう一つ、夢を叶える系映画の中でなんだか、見終わった後に爽快になるのが、「Erin Brockovich(2000年)」。主人公の年齢も我々にグッと近くなり(笑)、時代も1990年代。アメリカ西海岸を拠点とする大手企業PG&Eから、史上最高額の和解金を勝ち取ったエリン・ブロコビッチの半生を描いた作品であります(Wikipediaからパクりました。すみません)。彼女は、無職。そして、2度の離婚の末に、3人の子供を抱えたシングルマザー。彼女の破天荒ぶりには目を見張るものがありますが、何よりも、環境汚染で苦しむ、住民のために奔走する姿は、素直にかっこいい。ちなみに、Erin本人もウェイトレス役で出演しています。この映画は、アカデミー賞を始め、ゴールデングローブ・主演女優賞など、様々な賞を総なめ。ご存知の方も多いと思うので、詳細な説明は割愛しますが、どんな状況になっても、自分さえ諦めなければ道は開く。わかってはいるんだけど、もう一押し欲しいときに、おススメです。

—— 因みに気になる彼女のその後、これまたなかなか波乱万丈で、子供がドラッグにはまったりして中々大変そう。彼女の自伝、Take it from Meでも描いてあります。映画を見ても思いましたが、家族と時間を一緒に過ごすこと、やっぱり大事ですね。働きがちな日本コミュニティに関わるお父さん、お母さん、御気をつけを。。!

さて、すっかり忘れていましたが、このコラムにはルールが存在し、そのルールにのっとり自分の映画好きや映画の思い出話を語る必要があります。そこで、ほんの少しだけ、著者と映画について



*イメージ。宇宙兄弟を読むと宇宙服のサイズ制限により宇宙飛行士をあきらめる人がいたことを知ります。。。著者:*christopher*
<http://free-images.gatag.net/>



[http://en.wikipedia.org/wiki/Erin_Brockovich_\(film\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Erin_Brockovich_(film))

お話しします。私が最初に劇場で見た映画は、「ドラえもん のび太とアニマル惑星」。子供のときに何回も見た映画は、まさにこうしたドラえもんシリーズや、宮崎駿監督のアニメの数々。短編のアニメと違ってアニメの映画はジャイアンはいいヤツで、心の友よ！って叫ぶし、なんというか、映画の時代背景、経済状況は違えど、友情や家族愛、わかりやすいメッセージが込められてて、そのストレートな物語の展開が私には心地よくて、好きなのです。一方、人間の複雑な精神模様を描写していると思われるエヴァや、ガンダム。。。こちらは少々私には高尚すぎて、食わず嫌いの的に見たことがあります。

そんなアニメの映画で、映画の季節とはまったく合わないのですが、家族の団欒が増えるこの時期ということで無理やりお勧めすると、「サマーウォーズ(2009年)」。私は、邦画は日本のiTunesから映画をレンタルして見る事が多いのですが、レンタルしてまず2回連続で見て、次の日に更に1回見た映画、それがこれです。それぐらい、なんだかはまってしまった映画です(あまりの気に入りに具合に購入しようと試みたが、iTunesでは販売していませんでした。残念)。

この映画は、核家族化する日本や、ソーシャルネットワーク化していく社会問題を取り上げながら、家族という素敵な繋がりを教えてくれます。この映画で出てくるカッコいい栄おばあちゃんの名セリフ「いちばんいけないのはおなかがすいていることと、独りであることだから・・・」、心に染みまします。年末年始、家族っていいなあって思い出すきっかけになれば何よりです。

というわけで、次号のキーワードは来年の干支に因んで「馬」です。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第26回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう：ロバート・レッドフォードを逃したアカデミー賞」

Star Noodle

今年も3月2日の日曜日、映画関係者のお祭りとも言えるアカデミー賞が終わった。予想通りステーブ・マックウィーン監督の「それでも夜は明ける(12 Years a Slave)」(邦題は何故原題から飛躍してしまうのか、常々疑問に思っている)がアカデミー作品賞を受賞し、主演男優賞には「ダラス・バイヤーズクラブ」のマシュー・マコノヒー、ウディ・アレン監督の「ブルー・ジャズミン」で好演したケイト・ブランシェットが主演女優賞に輝いた。この評価はアカデミー賞候補作を全てご覧になったことのある読者にお任せすることにし、偶々この3本を観たことがある筆者としては、順当な結果ではないかと思っている。「それでも夜は明ける」のストーリー性は、それが実話に基づき、アメリカの暗い歴史の一部であることを勘案すると、映画としても見事な仕上がりであったと思う。またケイト・ブランシェットは、ローラーコースターのような人生の悲哀と、その中で逞しく生きるジャズミンを見事に演じ、圧倒的な存在感を示した。今回の結果で唯一残念なのは、あのロバート・レッドフォードが主演する「オール・イズ・ロスト～最後の手紙～」が主要部門のノミネートから外れたことである。



出典：ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ロバート・レッドフォード>

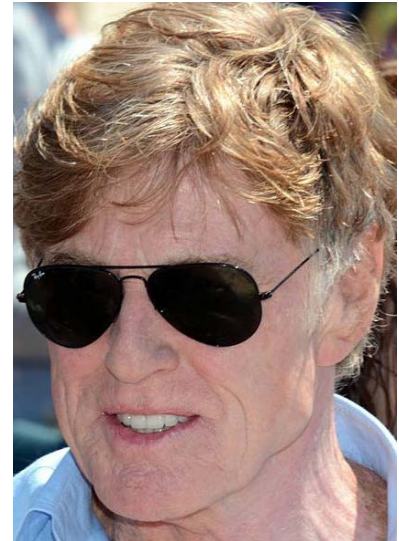
レッドフォードはあの澄んだ青い目と眩しいほどの金髪で、70年代から世界中のファンを魅了してきた(実は著者もその一人)。男優として名を馳せる機会を作った「明日に向かって撃て(Butch Cassidy and the Sundance Kid)」、バーブラ・ストライサンドの歌が耳に残る「追憶(The Way We Were)」、アフリカの広大な大地を舞台とする「愛と悲しみの果て(Out of Africa)」等の名作は多い。また監督としての腕も素晴らしく、1980年に初めて監督した映画「普通の人々(Ordinary People)」はアカデミー監督賞を受賞し、前号からのキーワードでもある「馬」と意思疎通のできるトレーナーの映画「モンタナの風に抱かれて(The Horse Whisperer)」、リンカーン暗殺事件に関与した罪で米国史上初めて死刑となったメアリー・サラットを描いた「声をかくす人(The Conspirator)」もレッドフォード監督の作品である。

レッドフォードはアカデミー監督賞は受賞しても、主演男優賞は「스팅」でノミネートされただけで、受賞したことはない。尤も2001年に「アカデミー名誉賞」という栄誉に輝いてはいるが、現役の役者としては居心地の悪い賞であったであろう。レッドフォードは、今回の「オール・イズ・ロスト」でゴールデングローブ主演男優賞にノミネートはされたが、アカデミー賞ではノミネートすらされていなかった。これに対して、レッドフォードは配給会社が多大な資金を要するキャンペーンや、映画の宣伝活動を十分に行わなかったことを指摘している。しかし、同時に「不満に思っているわけでも、怒っているわけでもない。ハリウッドは全てビジネスであり、その間尺に合わなかっただけだ。自分

は俳優としてのルーツを再発見する良い機会を与えられたと思っている。非常にハッピーだ」と述べており、彼がアカデミー賞を超えた次元にいることが分かる。

今回のアカデミー賞を逃した(換言すれば、アカデミー賞が逃した)素晴らしい映画はJ.C. チャンダー監督・脚本による所謂サバイバルもので、出演者はレッドフォード唯一人である。しかも、100分余の上映で台詞も殆どない。大海でのサバイバルものとしては、トム・ハンクスの「キャスト・アウェイ」やヤン・マーテルの冒険小説を映画化した「パイの物語(Life of Pi)」があるが、「キャスト・アウェイ」での南太平洋の無人島に流れ着いた主人公にはバレーボールの「ウィルソン」が、「パイの物語」では同船して生き残ったベンガルトラの「リチャード・パーカー」がいる。しかし、この映画には動物もモノの「仲間」もない。そこにあるのは正真正銘の「孤独」である。正直に白状すると、筆者が映画館に入った時、いくら憧れのレッドフォードと言えども、77歳のおじいちゃんの100分もの一人芝居は、東京からの出張から戻ったばかりの時差ぼけ頭にはひよっとすると厳しいかもしれないと思っていたのである。隣の友人に分からないように、少々昼寝でもしようというような生ぬるい態度で椅子に座った。ところが、全く予想に反し、100分間足を組み替えるのも忘れるほど夢中になり、吸い込まれるような海の偉大さに圧倒されていた。インド洋をヨットで航海していたレッドフォードが、ヨットの故障によって遭難し、洋上で嵐や孤独と戦いながら過ごす何カ月(時間の経過は不明)の話である。一文で書けるあらすじではあるが、大海、自然の偉大な力、その中の人間の無力さをずしんと感じさせ、謙虚な気持ちにさせる作品である。これを可能にしたのは、レッドフォードの演技力に他ならない。この映画を観た直後(勿論昼寝なしで)、ひよっとするとレッドフォードはこれを最後の大作として演じたのではないかと思った。専門家の誰もそんなことを言っているわけではないが、この作品の中には彼の全てが表れていたと思う。往年の金髪で青い目のレッドフォードは忘れられないが、80歳近くになってこれほど生命を賭ける仕事ができるレッドフォードも素晴らしいと改めて惚れ直した次第である。

筆者は元々ハリウッド系の映画より、自主映画、外国映画が好きだが、この類の映画を上映する映画館はワシントンDCでは、E Street Cinemaがある。しかし、お勧めは同系列で、最近新装されたBethesda Row Cinemaである。この映画館は正にベビーブーマー、乃至それより少し年齢の高い層向け(即ち50代半ば以上!)に新装されたと言っても過言ではない。まず、あのベセスダの厳しい駐車環境の中で、映画館の真上に、平日は夕方から、週末は終日、7ドル払えば駐車できるスペースがある。2時間、3時間という時間制限を気にしながら映画を観る必要もない。更にチケットをネットで購入する際、座席指定ができるようになっている。チケット代は手数料入れて12ドル50セント(他は概ね9-10ドル)ということで、少々高めではあるが、チケットを持っているのに30分も前から並ぶ



出典: ウィキペディア
(http://en.wikipedia.org/wiki/Robert_Redford)



Bethesda Row Cinemaの外観

とか、ぎりぎりに行って一番前の座席しかないという事態は回避できる。その上素晴らしいのは、座席である。座席間隔がゆったりしていて、椅子も少々大き目でリクライニングもする。それに加え、ロビーには何とバーがあり、ワインを片手にレッドフォードを観ることも可能なのである。このような少々贅沢な映画館の環境は、映画鑑賞をなるべく安価にしたいティーンエイジャーや若者受けはしないが、経済的に少々余裕のあるベビーブーマーには最適である。実際にこの映画館に出入りする年代層が高いのには驚かされる。先日25歳の娘を連れて行った際、彼女は「私が一番若いかも」とつぶやいていた。というわけで、自主映画をワイン片手にゆっくり鑑賞したいベビーブーマーにはぴったりの空間である。

レッドフォードの今後の活躍を祈りつつ、次号へのキーワードは「サバイバル」としたい。



Bethesda Row Cinemaのロビー。出典: Bethesda Row Cinema ウェブサイト(<http://www.landmarktheatres.com/washington-d-c/bethesda-row-cinema>)

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第27回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう：人も企業もサバイバル」

Dream Watcher

旅客機に乗るのが好きだ。窓から見下ろす山脈や陽光に照らされ輝くような雲上の世界、点在する明かりが星空のようにも見える夜の街並み。非日常の景色がなんとも言えない。でも、理由はもう一つある。職業柄、携帯電話が頻繁にかかり、確認しないといけないメールの量が多いのだが、フライト中の間はしばらく解放される(もっとも、最近はネットがつながる旅客機も増えているが)。

海外出張の場合、特に太平洋路線の場合はフライト時間が長いので、何をして過ごそうかと考えるだけで楽しくなる。だいたい睡眠不足の解消に努めるのがもっぱらなのだが、あり余る時間の一部は、つい座席で見られる映画に向けてしまう。映画館ほど迫力はないにせよ、キャビンアテンダントがサーブしてくれる中で、雲上で見る映画もまた、非日常の体験だ。

2月の出張で、たまたま見たのが「ゼロ・グラビティ」だった。全く予備知識なく、時間つぶしのつもりだったが、いい意味で期待を裏切られた。

地上600kmの宇宙空間で、望遠鏡を修理中の宇宙飛行士たち。ロシアが自国の人工衛星を爆破したことがきっかけで、大量の破片が銃弾のように襲いかかり、船外作業中の宇宙飛行士の母船も破壊されてしまう。サンドラ・ブロック扮するストーン教授と、ジョージ・クルーニーが演じるベテラン飛行士マットは同僚を失いながらも、宇宙遊泳で、ほかの宇宙ステーションに向かい、地球への生還を試みる。一步間違えば、確実に死が待つ状況。地上と違って救援はありえない。

登場人物が1人か2人のシーンが大半で、宇宙服を着ているから表情もわかりにくい。でも、食い入るように見ってしまったのは、自分の経験できない極限状態を想像できるからだろう。雪山の遭難みたいにとどまる、何もしない、という選択肢もない。少ない酸素により、行動時間も限られる。絶えず、「生か死か」の結果にしかつながらない選択を迫られる。そんなだれにでもわかりやすい「サバイバル」が魅力の秘訣なのかもしれない。映画館の3Dならもっと迫力があっただけが悔やまれた。



「ゼロ・グラビティ」

[http://en.wikipedia.org/wiki/Gravity_\(film\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Gravity_(film))

サバイバルは、なんとなく、無人島や大海原の漂流で生き残るようなイメージだが、人間の生き死にだけに限らない。JALやGMなどの巨大企業も一時、経営破綻した。花形だったソニーやシャープなどの家電メーカーは苦境を経験して久しい。21世紀に入り、企業の栄枯盛衰が激しくなっている。正しいルートを示す海図はなく、企業も「ゼロ・グラビティ」の中をもがいているようにも見える。

東日本大震災から3年目となる3月11日、米国の通信業界が注目するイベントがワシントンで開かれた。ソフトバンクの孫正義社長が全米商工会議所で、政府の関係者などを招いて米国の通信環境をテーマに講演をした。ソフトバンクは、傘下の米携帯3位スプリントを通じて、米携帯4位のTモバイルUSの買収交渉を水面下で続けている。もともと、スプリントの買収を行ったことがきっかけで、米国は通信業界の再編を加速させているだけに、孫社長の挙動に注目が集まる。孫社長は震災被害者への多大な寄付でも知られる。この日を選んだのはそういうこともあったのかもしれない。



「講演中のソフトバンク 孫正義社長」

講演で孫社長は、米国は電気と車で20世紀の世界をリードしたが、21世紀を主導するカギは通信インフラであることを強調した。しかし、米国はインターネットを発明した偉大な国、グーグルなど多くのネット企業が活躍しているのに通信速度は遅く、値段も割高だと訴えた。たとえば、利用者は日本の1.7倍の単価の料金を払っている。必要なのは価格とネットワークにおける競争だと。決して、TモバイルUSの買収については触れなかったが、競争が必要だといっていることから明らかだ。そして、米国に対しても、通信インフラが弱いままでは覇権は握り続けられないことを示唆した。

孫社長の講演やインタビューは米国でも報道された。アメリカのブロードバンドが割高で遅いとの主張に共感を覚える米国民が多いかはわからない。孫社長の例えだが、北京は公害で青い空が見えないことが多く、市民は空が青くないことに慣れたのと同じように、米国民も実情を知らなければ、なんとも思わない。だから、実態をアピールしたのだろう。いずれにせよ、買収計画は、許認可権限を持つ当局が難色を示しており、実現は微妙だ。

孫社長は起業してから、様々な買収や出資を手がけてきた。中には失敗したものもある。保有株の株高を背景に買収を進める手法は時に批判された。

通信規制を巡って政府とも対峙した。ソフトバンクはNTTに対抗して、ブロードバンド事業に参入するが、ITバブル崩壊の直撃も受けた。本人は当時を振り返り、「一時、ビルゲイツより金持ちだった。しかし、20兆円だった株価の99%が消えた」という。さらにブロードバンドも赤字が続いた。ソフトバンクは破綻するだろうと思われた。本人も「怖かった。政府にけんかを売るんじゃないかと思った」と話す。

しかし、決して沈んだままになることはなく、「なんとか生き残った(managed to survive)」。

その後も、ボーダフォン日本法人の買収を手がける。彼の手法への賛否両論はさておき、ソフトバンクの携帯電話やブロードバンド参入のおかげで、通信料などが安くなったのは疑いの余地がない。明らかに日本の消費者はメリットを受けた。

失敗すれば、企業として終わるかもしれないのに、常に規模の拡大や新業種の参入を試みる。何もしない、とどまることが企業として「終わり」を意味するからなのだろう。破綻した企業の多くは、時代が変化しているのに、改革やリストラをしなかったといった、対応を誤ったケースが少なくない。

ゼロ・グラビティの本当のタイトルはGRAVITY。行き着く先を示している。ソフトバンクの本当のタイトルは？ まだ見えぬ行き先は映画に劣らず、見所が多いように思う。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第28回 「Here's looking at you, kid」

ワインとシャンパンとブライアン

「スマートフォン」による生活への影響は人によって様々です。決して酒豪では無いけれど、大のお酒好きな寄稿者にとって、ワインの選び方に少なからず影響を与えたのがスマホのアプリである「VIVINO」。これは、ワインのエチケット(ボトルの横に貼ってあるラベル)の写真を撮るだけで、そのワインの作り手、評価、価格などが即座に分かるアプリですが、これが面白い。ワインショップで店員さんと会話しながらワインを選ぶのに疲れた時などは、気に入ったエチケットをパシャリ。いつもは選ばない様な新たな作り手のワインに出会えるかも知れません。レストランではソムリエ風にワインを語る事もできますし、誰といつどんなワインを飲んだかの日記代わりにもなります。

寄稿者がお酒と共に好きなものが映画ですが、映画に登場するお酒の名シーンとして、1942年に公開された「カサブランカ」を挙げる方も多いのでは無いでしょうか。舞台は1941年、親ドイツのヴィシー政権下のフランス領モロッコの都市カサブランカ。ドイツの侵攻による戦火を逃れた群衆は、中立国であるポルトガルを經由してアメリカへの亡命を図ろうと、ポルトガルの首都リスボン行の航空券を求めてカサブランカへ集まってきます。その時期、主人公のリック(ハンフリー・ボガード)はカサブランカで「カフェ・アメリカン」というバーを経営していました。そこで彼は、元恋人のイルザ・ラント(イングリッド・バーグマン)との偶然の再会を果たす訳ですが、リックのアプローチに対してつれない回答のイルザへ発したセリフが「Here's looking at you, kid(君の瞳に乾杯!)」です。この場面は名セリフと共に余りにも有名ですが、2人がどんなお酒で乾杯したかをご存知ですか？



映画「カサブランカ」でのボガードとバーグマン
http://en.wikipedia.org/wiki/Casablanca_%28film%29

「カサブランカ」は白黒映画の為、実は色を判別するのが難しいですが、このシャンパンのエチケットに斜めに入った赤いラインから判別がつかます。シャンパーニュ地方を代表する「G.H. Mumm」のシャンパンです。現在は「コルドン・ルージュ」というラインナップで販売されており、ワシントンDCでもちょっと気の利いたリカーショップで購入可能です。

シャンパンについて少しお話したいと思います。そもそも、シャンパンとは、フランスのシャンパーニュ地方特産の発砲ワインですが、その特徴は「多世代間の種の共存」と言った所でしょうか。シャンパンは多くの場合ピノ・ノワール種に代表される黒葡萄と、シャルドネ種に代表される白葡萄という、異なる品種のブレンドによって作られます(様々な畑から異なる種を選別する事で、一定品質を追求す



G.H.Mumm社の
Cordon Rouge

るというコンセプト)。また、一般的な「ノン・ビンテージ・シャンパン」の場合には、様々な年(通常は収穫年の前後3~5年)の葡萄を使ったブレンドが行われます(いわゆる、アッサンブラージュ工程)。これにより、シャンパンは瓶の中で「年代を超えた種の共存」を実現している訳です。ここまでがシャンパンの基本形ですが、幾つかの異端児的製法が存在します。

「カサブランカ」効果で一気にMummファンとなった寄稿者は、2000年代後半にシャンパーニュ地方のMummワイナリーを訪問し、「Blanc de Blancs: ブラン・ド・ブラン」と出会います。フランス語で「白の中の白」を意味するこのシャンパンは、シャルドネ種を中心にした白葡萄のみで作られます。複数種の赤・白葡萄のブレンド製法を前提にしたシャンパンの中では「Blanc de Blancs」は異色の存在ですが、これが何とも繊細且つ力強い余韻をもたらします。これはやはりシャルドネ種の特徴を最大限に活かす製法に大いに依存しているものと思われます。シャンパン、奥が深いです。

話を「カサブランカ」に戻しましょう。映画の各所にちりばめられて気の利いたセリフ、イングリッド・バーグマンの凜とした美しさ、そして2人の過去の思い出である「As time goes by」が切なく流れる場面構成、継ぐ言葉がありません。

シャンパンが登場する映画としては、「プリティ・ウーマン」の印象が強いですね。「プリティ・ウーマン」では、リチャード・ギアがジュリア・ロバーツの為に、ホテルでシャンパンをルームサービスします。ロバーツはそのシャンパンをイチゴと共に楽しみますが、この時のシャンパンは「Moët & Chandon Brut Imperial」。Moët & Chandon社と前述のMumm社のワイナリーは車で20分とご近所ですので、パリ旅行の際は、少し遠出してシャンパーニュ地方を巡るのも面白いかもしれません。

という事で、次のキーワードは「旅行」にしたいと思います。

寄稿者紹介: ワインとシャンパンとブライアン

学生時代、渋谷のバーでバーテンとしてカクテルと出会い、社会人となってからはワイン、シャンパンに目覚める。たまに誤解されますが、バーテンとソムリエは別物です。



G.H.Mumm社の
Blanc de Blancs



Moët & Chandon社の
Brut Imperial

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第29回

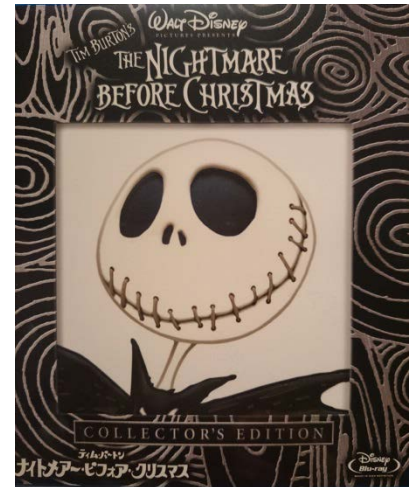
No carrot, my life

ひょんなことから映画を語る会に誘ってもらい、話の盛り上がり任せのまま、気づいたら「ワシントンで気ままに映画を語ろう」の原稿を書くことになっていて、ここでもまた人生何があるかわからないと改めて思いました。貴重な機会、ありがとうございます。

さて、「映画を語る会」の原稿を書くとなるとさぞかし映画を見るのが好きで詳しいと思われそうですが、自分自身は全くそういうわけではありません。映画を観るのは好きですが、特筆できるほどたくさん観ているわけでもないし、監督や俳優に詳しいわけでもありません。むしろ観ている本数自体は少ないかもしれません。ただ、人気なもの、話題作はあまり積極的に観に行っていないので、B級ではないけれどもわりとマイナーな映画は観ているほうとは言えそうです。素直でないというのがありますが。もちろんB級映画を観るのも好きですけど。ただ、一致するときもあります。世界で、とりわけ日本で話題になった「アナと雪の女王(原題:Frozen)」は飛行機の中で3回ぐらい観ました。

映画と言えばデートの定番(口実の定番か?)ですが、僕自身はあまり観に行った記憶がありません。むかーし、予備校生の時に「タイタニック」を観に行ったことは、色々な点から印象深く残っています。ちょうどディカプリオ大人気の時ですね。映画館で観たとき、とてもよかったと記憶しています。当時の日記を読み返せばもっと具体的な感想があるかもしれませんが、とにかくいいなあと思ったのは覚えています。そのあとも何回か観ましたが、やっぱりおもしろいと思いました。ただ、当時はディカプリオに対してそんなに好意的ではなかったような気がします。別にライバル心を持っていたわけではありません。優男という印象が先行し、ルックスがいいだけじゃないかと思っていたかもしれません。それはそれでとても重要なことではありますが、若かりし頃の自分にとって、俳優とはルックスだけでなく、演技も抜群にうまくなくてはいかん、という信条(思い込み?)があったと思います。その後、「ギルバート・グレイブ」を観て、ディカプリオの演技力に感嘆し、印象ががらっと変わりました。

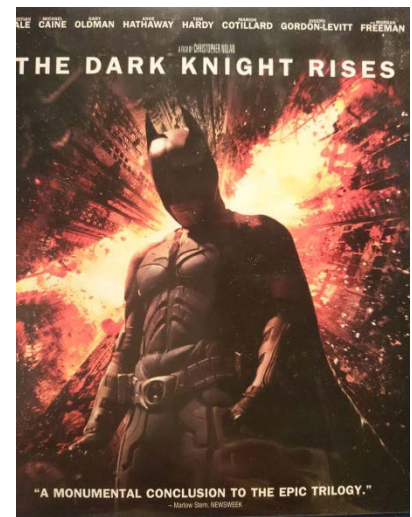
好きな映画のジャンルはアクションなど、観終わったあとすかつとするものが基本的に好きですが、興味・関心の赴くまま何でも観ます。監督・俳優には詳しくはないものの、ティム・バートンとジョニー・デップの組み合わせは、独特の世界観があって好きです。はまる人とそうでない人は大いに分かれそうです。何とも言えない暗さと、だけど陰湿ではない世界観と、それに合ったコスチュームやメイク。メジャーなところでは、「シザーハンズ」「チャーリーとチョコレート工場」、少しマイナーな「ダーク・シャドウ」「スウィーニー・トッド」。ジョニー・デップは出ていませんが、「ナイトメア・ビフォア・クリスマス」も、若干キモイですがおすすすめです。でも原作の絵本の方が切ない感じがして個人的には好きです。



「リンカーン／秘密の書」も実はティム・バートン作品です。エイブラハム・リンカーンが、肉親をヴァンパイアに殺されたことをきっかけにヴァンパイア・ハンターになるべく修行をし、立ち向かうという設定です。この時点でちょっと奇天烈臭が漂い始めています。南部はヴァンパイアに影から支配されており、人類とヴァンパイアの戦いが南北戦争へとつながっていきます。ヴァンパイアとの戦いを終わらせるためには黒人奴隷を解放しなければならない、と考えたリンカーンは政治家を志し、やがて大統領となり黒人奴隷を解放します。最終的にヴァンパイアを倒し、すなわちリンカーン率いる北軍は南軍に勝ち、南北戦争は終結します。この映画、観た当初は「そういう解釈もあるのかなあ」なんて思ったのですが、よくよく考えてみれば相当奇抜な設定ですね。リンカーンは1865年、フォード劇場で狙撃され、それが元で生涯を閉じます。リンカーンが狙撃されたフォード劇場は、DC市内にあり(511 Tenth St, NW, Washington, DC 20004)、改修のため一時閉鎖されていましたが、2009年に再オープンしました。



「暗い」つながりで、バットマンの新シリーズ(Dark Knightシリーズ)はイチオシです。旧作は観ていないので比較はできませんが、バットマン自身がほどよくリアルにマッシュになり、ガジェット類や乗り物類も兵器としてのリアルさを持ちながら、ヒーローものにマッチするデザインで、フィクションとリアルの狭間にある感じが自分をワクワクさせます。その反面、ストーリーはスカッとした勧善懲悪・無敵の主人公というわけではなく、活躍して帰宅すると満身創痍、人を助けられなくてひどく落ち込むなど、ともすればカッコ悪い主人公になりそうだけれども、それでもやっぱり格好いいあたり、Dark Knightの魅力の1つと言えそうです。



他方で、「Love Actually」のような恋愛ものも観たりします。この映画のいいところは、基本的にはハッピーエンド。そして同時並行で進む複数の恋物語に関わる当事者達が、親子であったり、兄妹であったり、友人であったりという感じで色々なところでつながっていてそれが最後にすーっとつながるというストーリーがじっくりきて、登場人物のさわやかさと相まって観ていてとても気持ちがいいのです。

あんまり自分語りばかりするのも気が引けますが、どうも映画に影響を受けやすいようで、アクション映画を観れば自分にもできるんじゃないかと錯覚し、恋愛映画を観ればこんな恋が自分にも待っているかもしれないと勘違いをすることが往々にしてあります。自分でもよくわかっているので、とりわけ旅行映画は観ないようにしています。旅行映画を観て影響を受けて、仕事ほったらかしてふらっと旅に出てしまったら大変です。とても困ります。

「旅行」。ワシントンに駐在する人ならば、その駐在期間中に日本からはなかなか行きづらいところへ行きたいと考えるのではないかと思います。例えば南米。日本からだとも主要都市への移動だけでまる1日要し、地方都市に行こうものならさらに半日はかかることを覚悟する必要があります。かという自分も例外ではなく、ヨーロッパや南米、アフリカへ行ってみたいと考えて(夢見て)おります。

そしてなんとしても南極へ。

もちろん米国国内にも魅力的なところはたくさんあります。有名どころとしては数多くある国立公園。グランドサークルやイエローストーンはもちろんのこと、デスバレーなんかにも行ってみたいですね。東海岸からだ意外に遠いのが難点です。でも東海岸にも魅力的なところがあります。ワシントンDCから比較的近いシェナンドー国立公園や、ちょっと足を伸ばしてグレート・スモーキー山脈国立公園などなど。

そんなバージニアは、南北戦争時の連合国に属し、北軍(合衆国)と接していたため、激戦地だったそうです。

今回取り上げる映画「コールド・マウンテン」もこのバージニアで幕を開けます。南北戦争のさなか、北軍は密かに地下道を掘り、爆薬を仕掛けます。北軍が仕掛けた爆薬により、大きな被害を受け、大混乱に陥る南軍。その混乱に乗じて押し寄せる北軍も、爆薬で開いた穴にはまり、身動きが取れなくなったところに南軍が反撃し、凄惨極まる様子を呈します。その後負傷し、病院へ収容された主人公インマンの元へ届いた手紙により、故郷であるノースカロライナ州のコールド・マウンテンへ帰るため、軍を脱走し徒歩で帰る旅に出ます。



悲惨な戦争の描写と対照的に、インマンの故郷であるコールド・マウンテンでの思い出が美しく、柔らかな空気感で描かれ、過酷な目の前の現実と交互に映し出されます。インマンが出会ったエイダという女性は、牧師の娘で裕福な家庭に育った超美人なお嬢様です。ほんとに美人です。生きていく上で役に立つことは一切教えられてこなかったため、父が亡くなったあとは日々の生活にも困窮していたところ、非常に野性味あふれる女性ルビーが登場します。最初は苦労しますが、だんだんお互いに打ち解け、エイダも逞しくなっていくます。

一方インマンは、いろいろな人と出会い、別れ、旅を続けます。南北戦争と愛の物語と形容されることの多いこの映画ですが、僕は命の連鎖の物語でもあるのかなと思いました。一緒に従軍してきた友人の死であり、時に道連れとなった牧師の死であり、北軍の兵の死であり、インマンの糧となった山羊の死といった具合に、いろいろな人の、動物の死とインマンの生が幾重にも重なりあった物語のかなと思いました。

舞台となったコールド・マウンテンは、ノースカロライナ州に実際にある山です。劇中、エイダの台詞に「ブルーリッジ」というのが出てきますが、その名の通り山々の連なりが青く見える場所だそうです。ワシントンDCからだだと車で約8時間。ちょっとした旅行には適当な距離です。劇中のきれいな景色がとても印象的だったので、一度訪れてみようと思ったのですが、Wikipediaによれば撮影のほとんどはルーマニアで行われたとか。。。。

さて次回のキーワードは「ヒーロー」でお願いします。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第30回 ～番外編：ミュージックドキュメンタリーを語ろう～ 「馬小屋で生まれた『ボヘミアン・ラブソディー』」

ボヘミアン

今しがた自宅を出て歩き始めたばかりなのに、急に見知らぬ深い森の中へ旅行に出たような気持ちになった。

小道を登っていくと、左目の視界のはじっこに真っ白な素早いものがさっ、と横切った。目で追うと、緑の中を白馬が小さく走り去っていった。

馬があんなにきれいで輝いて見えたのは2回目である。

1回目は、10年近く前だった。その時のことを某新聞に書いた。ロックの名曲で、「ボヘミアン・ラブソディー」という曲がある。この曲をスタジオ収録した英国のモンマスという田舎町を2005年に訪ねた。

往年の名曲を生んだスタジオは、なんと馬小屋を改造した素朴な外見だった。馬もまだいた。当時の記事を引用する。



2005年2月21日 <名作JOURNEY>

「ボヘミアン・ラブソディー」を繰り返し聞いたのは、父の仕事の都合で米国に渡ったところだった。中学生だったが、英語がわからず、今でいう不登校になった。悩むうちに、自分は天の配剤で選ばれて異国で苦しみを与えられているのでは、という妄想に取り付かれた。

「これは本当の人生？ それともただの幻想？ 土砂崩れにはまったまま、現実から逃れようもない」

曲はアカペラで、こう静かに始まる。主人公は孤独な少年だ。人生始まったばかりなのに、人を殺してしまった。死ぬのは怖い、裁きは受けないといけない。お母さん、みんな、さようなら。いっそのこと、生まれてこなければよかった。すべてどうでもいい。どうせ風は吹いていくのだ……。

曲の中で、少年は運命に直面し、一人苦悶する。最初は切ないバラードで訴えるが、突然、大仰なオペラ仕立ての合唱の中で神や悪魔と対峙し、最後は悲劇の人生を達観する。十代半ばの私はこの苦悶の中に、「自分は選ばれた主人公」という強烈なナルシズムを感じ取り、自らを重ねたのだった。

作者は、英国で1970-80年代に活躍した4人組ロックバンド「クイーン」のリードボーカル、フレデ



ボヘミアン・ラブソディーのオリジナルジャケット
http://en.wikipedia.org/wiki/Bohemian_Rhapsody

イー・マーキュリー(91年にエイズで死去)。75年末の発表後、英国はじめ欧州や日本で爆発的にヒットし、クイーンは一気に国際的スターとなった。米国では90年代と遅れたが、やはり大ヒットした。

一方で、曲は当初から「歌詞も曲調も謎が多く、意味不明」との酷評も受けた。04年末も英BBCテレビが歌詞の意味を探る特別番組を組んだが、明確な答えはなかった。

この曲が録音されたのは、英南西部ウェールズの田舎町、モンマスにある「ロックフィールド・スタジオ」だ。クイーンは75年8月、この田園地帯に2週間こもり、同曲を含むアルバム「オペラ座の夜」を制作した。

オーナーのキングズリー・ワードさん(63)は、「4人はまだ大スター前夜で、少年のあとけなさが残る青年だった」と振り返る。

実はこのスタジオ、馬の厩舎をワード家が60年代にスタジオに大改造したものだ。室内には高性能のスタジオ機器が装備されているが、外観は馬小屋のまま。馬もなお5頭いる。スタジオの一部は今も馬小屋として使われている。

ここで、クイーンのほか、ラッシュやロバート・プラントら、ロックの大御所が次々と名作を録音した。

「都会の喧騒から離れた環境で自分を見つめられるのでしょう。フレディーは馬具小屋だった所で『ラプソディー』のピアノ部分を何度も手直ししていた」とワードさんは話す。

他の3人が生粋の英国生まれなのに対し、マーキュリーはアフリカのザンジバル(現タンザニア)で生まれ、インドの厳しい全寮制学校で育った。「あのころに、誰にも頼らない『一人ぼっち』の自分が生まれた」という。十代のころ両親と移り住んだロンドンで、よそ者に対するいじめと、自分がゲイだという事実と直面し、無口になった。

やはりそうなのだ。彼は当時、孤独に「選ばれし者」として向き合っていた。ラプソディーに漂うのはその自己陶醉の名残だ。今なお多くの人がこの曲を愛するのは、皆がその感覚に酔うからではないのか。

つまり、人間、皆が「選ばれし者」ということか。

【ボヘミアン・ラプソディー】英国のロックバンド「クイーン」が1975年末に発表した5枚目のシングル。英ポップ音楽チャートで九週連続1位になるなど、クイーンの出世作となった。謎に満ちた歌詞、オペラ仕立てのコーラス、約6分という曲の長さなど、異例づくめの作品だが、今も世界中で愛される。2002年には「英国で最も偉大な曲」の投票で、ジョン・レノンの「イマジジン」を抜いて1位になった。

◆(引用終わり)



クイーンが「ボヘミアン・ラプソディー」を録音したロックフィールド・スタジオ。馬小屋を改造した。

http://en.wikipedia.org/wiki/Rockfield_Studios

クイーン抜きで私の青春は語れない。2005年当時、英国に住んでいた私がモンマス行きを決断するのに時間はかからなかった。

実際にスタジオの脇に毛並みの良い馬たちがいるのを見て、胸が踊った。ここでフレディーがピアノを弾き、あの旋律を生み出したのだ！馬たちがみな、本当に輝いて見えた。

問題の曲は実際、歌詞も曲調も謎に満ち、メンバー4人の顔が暗闇に浮かび上がるビデオも鮮烈で不気味だった。大昔の70年代前半にどう撮ったのか、当時から解明したいことだらけだった。

謎を解こうと大胆なチャレンジを試みたのが、英国の公共放送BBCである。04年、番組「The Story of Bohemian Rhapsody」を制作した。大学教授たちに歌詞の意味をめぐって議論させたり、当時ビデオ撮影を担当した専門家たちを探し当てて動画作りを再現したり・・・番組は約57分のドキュメンタリーとなった。

ロック曲を大まじめに議論した番組は放映直後から話題を呼び、英国内で何度も再放送された。

つい先日、番組がYouTubeにアップされているのを偶然発見した。今、番組は見放題である。ご関心のある方はどうぞ。

http://www.youtube.com/watch?v=NgD_eu_jlUQ

音楽バンドを取り上げた映画は、古くはビートルズの「A Hard Day's Night」や「Help!」など、結構ある。今回は恐縮ながら、伝説の名曲と、それをめぐるドキュメンタリー番組について語らせていただいた。この欄の掟だという次回のキーワードの提案は、「伝説」でいかがでしょう。

ところで、冒頭に歩いた不思議な森は、実在する。ワシントンDC北部にあるロック・クリーク・パークである。王子には出会えなかったが、白馬は本当にいた。Rock Creek Park Horse Centerで、素人でも楽しく乗馬ができる。

<了>



「ボヘミアン・ラプソディー」の作者、クイーンのフレディー・マーキュリー

http://en.wikipedia.org/wiki/Freddie_Mercury

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第31回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう：『紅の豚』」

チャンチータ

「伝説」というテーマをボヘミアンさんに指定頂いた。頭の中でこの単語を反芻すること数回、思い付いたのは「飛ばねえ豚はただの豚だ」という台詞でお馴染みの、マルコ・パゴット(通称:ポルコ・ロツ)である。

この「伝説の豚」ポルコが登場するのは、宮崎駿監督の「紅の豚」である。この映画は、世界大恐慌時の地中海を舞台に、空賊(空中海賊)と、それを相手に賞金稼ぎで生きる豚の物語である。正直、なぜマルコが豚の姿になってしまったのかは良く分からない。ただ、難しいことは抜きにして、第一次世界大戦後の動乱の時代でも、ロマンを追い求める男達(プラス豚)の生き様はなんとなく見る者に元気を与えてくれる。

そもそも、動力飛行機が初めてライト兄弟によって飛んだのが1903年。この実物は国立航空宇宙博物館に展示されている。そんな飛行機を豚が操縦してしまうのだから、もはや伝説以外の何者でもない。例えそれがアニメだったとしてもである。

そして話題を空から陸に移すと、今の時代でもロマンを追い求める挑戦が行われている。それが、ダカールラリーである。これまたお馴染みの1979年から始まったラリーレイド大会であり、2009年からは開催場所を南米に移している。幸運にも2010年大会開催時に、チリ・アントファガスタを訪ねたところ、日野自動車Team Sugawaraの皆さんにお会いできた。そして「ロマンを忘れてはいけない」という熱いメッセージを頂いた。

日々の生活の中でついつい忘れてしまう自分自身のロマンであるが、そんな時は「紅の豚」を見ながら、ダカールラリーの速報を見ながら(※2015年大会は2015年1月7日スタート)、はたまたお酒を飲みながら(※14th St. “The pig”というお店もオススメ)、今一度ロマンについて思いを馳せたいと思う今日この頃である。

ということで、次のキーワードは「ロマン」でお願い致します。



画像出典: Wikipediaより

http://en.wikipedia.org/wiki/Porco_Rosso

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第32回

「ワシントンで気ままに映画を語ろう：『アメリカ』を感じる映画たち」

メッセンジャー

「ワシントンで気ままに映画を語る会」の会合に2回ほど参加させてもらったご縁から、この度本誌に寄稿する機会を頂いた。とはいえ、実のところ「映画を語る」よりは「映画を語る映画通の人たちの話を聞く」ことを主眼として会合に参加していた私は、正直このような場でご紹介できるような映画に関する知識を持ち合わせていない。寄稿依頼を頂いて、はてどうしたものかと考えた挙げ句、これを新しい映画を観る良い機会と捉え、これまで興味があった映画を観てその感想を書くことにした。

さて、私が受け継いだキーワードは、「紅の豚」から連想された「ロマン」である。大空を翔るのが男のロマンだとするならば、女のロマンは・・・と考えたが、ロマンと言えば浪漫飛行のイメージからどうしても離れられない。そこで思い出したのが、ワシントンに来たばかりの頃に足を運んだ航空宇宙博物館で見た真っ赤な飛行機。その飛行機の持ち主が、女性として初の大西洋単独横断飛行に成功した飛行士アメリア・イアハートである。可愛い真っ赤な飛行機と、博物館の説明書きに「飛行士としての業績だけではなく、1920年代後半～30年代に女性の職業人としてキャリアを切り開いたその生き方やファッションが注目され、アメリカ社会で国民的人気を博したヒロイン」と書かれていたのに興味を引かれたことを思い出し、彼女を描いた映画「アメリア」を観ることにした。ヒラリー・スワンクが演じるアメリアは、自然体で、カンザス訛りと思しき話し方と日に灼けた頬のそばかすがとてもチャーミングな女性である。



Lockheed Vega 5B, Amelia Earhart

女性であるからといってやりたいことを諦めたり気負ったりすることなく、資金集めのためには広告塔になるなど、やりたいことを貫くために女性であることが強みになる場合にはそれを利用し、そしてファッションへのこだわりは常に忘れない。これは私が女性として社会で働いていく上で理想とするキャリアウーマン像であるが、アメリアは、まさにこれを80年近く前のアメリカ社会で体現していた女性であった。彼女がその後のアメリカ女性の生き方に多大なインスピレーションを与えたというのうなずける。アメリアは、人生の最期の瞬間まで生涯を通じてロマンに生きた女性と言えよう。

アメリアがアメリカ社会で女性の社会進出の道を切り開いた代表的人物だとすれば、公民権運動により黒人の地位向上に貢献した代表的人物がマーチン・ルーサー・キングJr牧師である。1月19日のマーチン・ルーサー・キングJrズ・デーを前に、「Selma」を映画館に観に行った。

セルマの行進について予備知識が全くなかった私は、キング牧師と言えば、“I have a dream”の演説で有名な公民権運動の指導者であり、その偉業を描いた映画だと思って映画館に向かった。だが、見終わった後、これは単にキング牧師一人が主人公の映画なのではなく、アメリカの歴史を

動かした数十万の「人々」の力を描いた映画であると思った。この映画の中で、キング牧師は神様のような完全無欠の偉人ではなく、家族との関係に悩み、運動を続けることで無実の一般市民が血を流すことに心を痛めて迷い悩む、一人の人間として描かれている。そのキング牧師を後押ししたのが、黒人が白人と平等な権利を持つ社会を実現するため、白人官憲による理不尽な暴力にさらされることも恐れずに、断固とした決意を持ってセルマの行進に参加した20万の人々(これらの人々には黒人だけでなく白人も含まれる)である。その一人一人の人間としての圧倒的な力強さに、見ていて鳥肌が立った。キング牧師がこれらの人々を動かしたのも事実であるが、これらの人々の決意と行動がキング牧師を突き動かしたのもまた事実と言えよう。

もう一つ、この映画の中で印象的だったのは、キング牧師の演説の迫力である。言うまでもなくキング牧師は有名な演説の名手であるが、映画の中の演説シーンを見ていて、アメリカの歴史において人の心を動かす演説というものがどれだけ重要な役割を果たしてきたかということを改めて実感した。キング牧師を演じたデヴィッド・オイエロウオは、キング牧師の魂のこもった演説を見事に再現していたと思う。

この2つの映画を観て、アメリカという国が、アメリアやキング牧師、そしてセルマの行進に参加した人々のように、揺るぎない夢と信念を持って行動する人々によっていくつもの変革を遂げて進化してきた国であるということを改めて感じた。

さて、冒頭、本稿執筆のために映画を観ることにしたと述べたが、「映画を語る会」の会合で話題に上り、興味を引かれた映画がいくつかあった。会合でご紹介くださった方々からの完全な受売りであることをご容赦頂きたいが、最後にそのうちの2本を紹介したい。この2本もまた、それぞれ全く違った意味で、アメリカという国の真価を感じることもできる映画であった。

一つ目が、ソニー・ピクチャーズへのサイバー攻撃を引き起こした「The Interview」。「語る会」で話題に上った時には、内容は本当にくだらないコメディ映画だと聞いていたが、ハリウッドが描く「一般のアメリカ人から見た北朝鮮像」とはどんなものか見てみたいという興味があった。実際に観てみると、本当に馬鹿馬鹿しくて低俗なジョーク満載のドタバタ劇である。ただ、コメディ映画としては純粋に面白く、系統で言えば「ハングオーバー」とかそういった類のザ・ハリウッド的エンターテインメント作品で、声を上げて笑ってしまった場面もいくつかあった。不謹慎ではあるが、こんなにくだらない映画を巡って現実に彼の国がサイバー攻撃を仕掛け、米国がそれに経済制裁をもって対抗する事態に発展したのは、それ自体が喜劇のような話だと思ってしまう。



キング牧師記念碑



画像出典:

http://en.wikipedia.org/wiki/The_Interview_%282014_film%29

現実の世界でアメリカ政府は表現の自由に対する挑戦を許さない断固とした姿勢を示したが、この映画の中身自体、表現の自由に対するアメリカの価値観を物語っていると思う。(※ここからは若干ネタバレになるので、これから観たい方は本パラは読み飛ばしてほしい。)金正恩国家主席をインタビューする機会を得たTVショーの司会者とプロデューサーの2人は、CIAから金主席暗殺のミッションを与えられて北朝鮮に乗り込むが、最終的に2人は暗殺ではなく生中継のTVインタビューを通じて金主席の本性を暴き、北朝鮮国民の目を覚ませるという作戦を選ぶ。仮に実際に北朝鮮がこの映画の国内への影響を恐れてサイバー攻撃に出たという説が真実だとするならば、それはまさにこの映画の筋書きの正しさを証明しているのではないか。そこまで考えると、実はこの映画、コメディ映画の仮面をかぶった相当な社会派映画なのかもしれない。

「語る会」からの受売りのもう一本の映画が、「boyhood」。これは、小学校2年生の少年が大学に入学するまでの12年間にわたって、少年の成長と彼を取り巻く家族の軌跡を描いた映画である。特筆すべきは、これが全て同じキャストによって演じられていること。つまり、この映画は実際に主人公役の少年が大人になるまで12年間にわたって撮影された作品であり、その壮大な構想はアメリカ映画の懐の深さを感じさせる。映画は、シングルマザーの母と姉と暮らし、母と離婚して離れて暮らす父と定期的に出会う日々を送る、現代のアメリカではどこにでもありそうな家庭に育つ平凡な少年の日々を淡々と描いており、特にドラマチックなストーリー展開があるというわけでもない。だが、とある家庭のホームビデオを観ているような感覚で、場面が変わるごとに少年の身長が徐々に伸び髪型が変わり声変わりして一人の青年になっていく様を見ていると、少年の成長を見守るような気持ちになって、3時間近くの大作であるにもかかわらず飽きることなく夢中で観た。

あくまでフィクション映画なので多少の脚色はあるにしても、外国人の目からすると、現代アメリカでよくある家庭環境の中で育つ少年が成長していく過程というのはこういうものか、こういう環境の中でこういう経験を経た若者達がこれからのアメリカ社会を背負っていく人々になるのかと、典型的なアメリカ人のバックグラウンドを理解するという意味においても大変興味深い映画であった。

ここまで書いてきて、なんだか期せずしてアカデミー賞作品予想のような記事になってしまったが、私が「語る会」の方々からの紹介でこれらの映画に興味を持って観たように、読者の皆さんにとって、拙稿が少しでもここでご紹介した映画へと誘う契機となれば幸いである。

次回のテーマは、アメリア・イアハートやキング牧師に敬意を表し、「夢」でお願いしたい。



画像出典:

http://en.wikipedia.org/wiki/Boyhood_%28film%29

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第33回（最終回） 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

渡り鳥

いつも「ワシントンで気ままに映画を語ろう」を楽しく読ませて頂いていましたが、まさか私にバトンが回ってくるとは思ってもみませんでした。そこで、慌てて紹介する映画がかぶらないためにも、第一回から全て再度読ませて頂きましたが、新たに「観てみたい映画」も幾つも見つかри、思わず書き留めてしまいました。

さて、第一回の枝田淳さんのルールに基づき、まずは私と映画について触れさせていただきます。初めて観た映画は、1975年の夏休みに家族と行った「The Adventures of the Wilderness Family(邦題:アドベンチャーファミリー)」でした。大都会のロサンゼルスにうんざりしてロッキー山脈に移り住んだ家族の物語ですが、アメリカの美しい自然と野生動物に心奪われ、漠然とアメリカへの憧れを植えつけられた感じでした(その後、まさか日本とアメリカを4回も引越し通算13年近くも住むことになるとは思いませんでした)。小学生になってからは親と一緒に淀川長治に水野晴郎が紹介する映画ばかりを観ていました。印象に残っている映画はスティーブ・マックイーン主演の「大脱走」。彼がバイクで柵を飛び越えるシーンは何度もノートの隅に書いていました。そして、音楽の教科書で「大脱走マーチ」を見つけた時は、得意気にこの映画を知らない友人に語っていた覚えがあります。

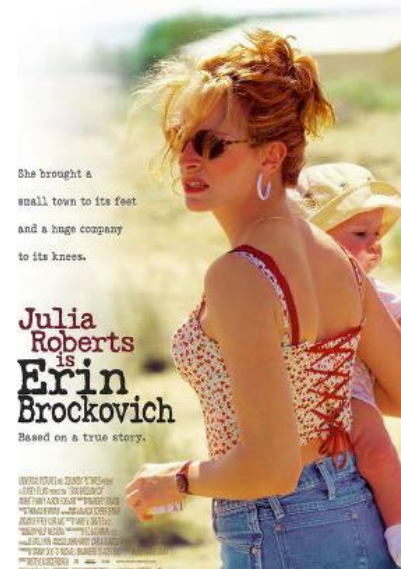
今日まで映画館で観た本数としては、ここで執筆されていた皆さんの中では最下位かと思えます。ですが、頻りにレンタルビデオ・DVDショップに通い、DC駐在前の東京勤務の2年間は、新聞も読めないような乗車率200%近い満員電車の中で、iTunesで購入した映画をiPod(iPadではありませんよ)の5×4cm程の小さな画面で毎日堪能しました。通勤は往復2時間でしたので、2年間で非常に沢山の映画を楽しみました。時には朝、会社の前まで到着したにもかかわらず、一時停止ボタンを押せない盛上がりシーンの時は、そのまま思わず通り過ぎて、きりが良い所まで観てから出社し、夜は深夜残業で酒臭い最終電車に乗ろうとも、映画の続きが観れると思うと、非常に楽しく帰宅できました。本来、大画面で雑音の無い映画館で観て貰うつもりで撮っている監督には大変失礼な話ですが・・・。

ところで、私の映画の観方は、好きな映画は何度も飽きずに繰り返し観るのが好きです(高校時代には大林監督の「さびしんぼう」は20回以上は観たような・・・)、一方で一度観た映画なら数分間の好きなシーンだけを観ればその映画全編を堪能した気分にもなれるため短時間で何本もの映画を梯子して、大変満足した気分にもなれる大変エコな鑑賞も得意であります(生粋の映画愛好家の方からはお叱りを受けそうですが)。上で書いた毎日の通勤中の映画鑑賞でも、もし朝から重い雰囲気のまま事務所に着きそうな場合は、やる気を出させてくれる映画の好きなシーンを3分も見れば気持ちよく出社できました。例えば、マット・デイモンが無名の学生時代に執筆した脚本で後に彼が主演した1997年公開のGood Will Hunting(邦題:グッドウィルハンティング/旅立ち)のバーでのシーン(これだけでピンと来る方も多いのでは?)などは好きですね。

さて今回頂いたキーワードは「夢」ということですが、他の皆さんのキーワードと比べると大変汎用性の高いキーワードのため、色々私の好きな映画を「夢」に絡めながらご紹介させていただきます。

まず一つ目は、ジュリア・ロバーツがアカデミー主演女優賞を取り、その他多数の賞に輝いた2000年公開の「Erin Brockovich(邦題:エリン・ブロコビッチ)」。

若い頃は町の美人コンテストで優勝したものの、その後、離婚暦2回、3人の子持ちの無学、無職、預金ほぼゼロのシングルマザーのエリン(ジュリア・ロバーツ)が、半ば言い掛かりに近いやり方で弁護士事務所働き始める。胸元が広く開いた派手な服にミニスカートのエリンは弁護士事務所内で煙たがれるも、外見とは裏腹に真面目な性格で、環境問題に苦しむ地元住民に寄り添いながら、最後には大企業から全米史上最高の和解額を勝ち取る実話に基づいた「夢」みたいなサクセスストーリーです。

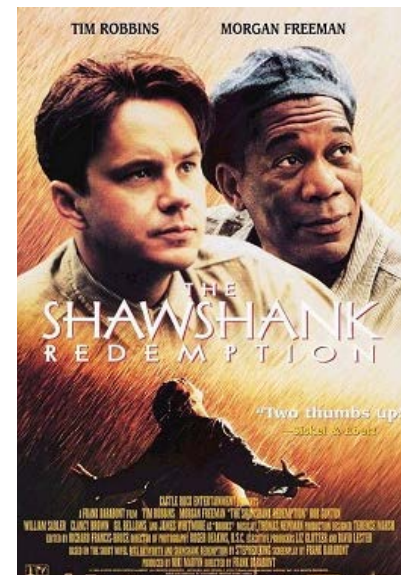


出典: wikipedia
[https://en.wikipedia.org/wiki/Erin_Brockovich_\(film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Erin_Brockovich_(film))

私も過去にアメリカの係争に巻き込まれ、エリンのように相手側の弱点を立証するために膨大な相手側の書類の山から1枚の証拠書類(まさに“needle in a haystack”)を探すために何ヶ月も書類チェックをしていた最中にこの映画に出会って、大変勇気付けられた記憶があります。また彼女が弁護士である上司に「複雑でもないことを複雑にしてしまうのが弁護士なのよ！」と罵るシーンがありますが、争っていた相手側の弁護士にそのまま言ってやりたいと大変共感した覚えがあります。ところで、この映画の中で、エリン役のジュリア・ロバーツに注文を取りに来るレストランのウェイトレスがいますが、その人こそが本物のエリンさん自身ですのでお見逃し無く！

次にご紹介したいのは1994年公開の「The Shawshank Redemption(邦題:ショーシャンクの空に)」。

ティム・ロビンズとモーガン・フリーマンが出演している脱獄映画で、最初はかなり重苦しい雰囲気が続きますが見終わった時には大変爽やかな清涼感溢れる一作です。妻殺しで投獄される銀行家のアンディ(ティム・ロビンズ)は、刑務所内で暴行などを受けながらも、彼の銀行家としての知見を活かしながら、仲間を作り、そして刑務所内の暮らしの中で生きがいを見つけつつも、最後まで外の世界を「夢」見ながら希望を捨てない姿に熱くなります。



出典: wikipedia
https://en.wikipedia.org/wiki/The_Shawshank_Redemption

特に印象的なシーンは、アンディが刑務所内の放送室に籠城しオペラのアリアを流すのですが、その美しいアリアが刑務所内に流れ、大勢の囚人が時が止まったように佇んで聞き入ってしまうシーンは忘れられません。私のお気に入りの邦画「BECK」でも高校生のいじめられっ子の主人公が、アンディを真似て、学校の放送室からロック音楽を校内中に流すシーンがありました(映画内では触れていませんが、漫画では「ショーシャンクの空に」の主人公のことを話しています)。そう言えば、これを書いている今日、NY州の刑務所から脱獄した囚人が捕獲されたと報道されていましたが、彼らもアンディのようにパイプをつたって脱獄したとか・・・(これ以上はネタバレになるので書けません)。

さて、最後にご紹介したいのは、「夢」に絡めるには少し無理がありますが、米国史上最悪の裏切り者と云われる、FBI上級捜査官だったロバート・ハンセンが2001年に現行犯逮捕される実話に基づいた2007年公開の映画「Breach(邦題:アメリカを売った男)」です。クリス・クーパー扮する裏切り者ロバート・ハンセンとライアン・フィリップ扮する若きFBI訓練捜査官エリック・オニールの息詰まるやり取りが素晴らしいです。このハンセンは20年以上にも亘ってFBIのみならず、CIA、国防総省、ホワイトハウスなどの膨大な国家機密をロシアに売り渡し、米国にとっては史上最悪の情報災害とも言われているそうです。

ストーリーとしては、若いオニールが上司から訳も分からずに退屈なデスクワーク部署に異動を命じられ、新しい上司となるハンセンの行動を内々に逐一報告するよう指示を受けます。一方、ハンセンは一流の捜査官でもあったため、オニールを信用せず非常に警戒します。派手なアクションや銃撃戦などは一切ありませんが、非常にスリルある駆引きが繰り広げられ、最後はオニールの活躍でハンセンは逮捕、それが全て実話だったのかと思うと、そのプレッシャーに押しつぶされそうになります。

実はこの映画を観るきっかけとなったのは、ハンセン逮捕後、FBIを退職しDCでコンサルタントをしている本物のオニール氏と偶然、仕事をする事になり、その際、アメリカ人の同僚達が彼の名前を聞いた際に非常に驚き、彼をnational heroだと称したからです。2001年にハンセンが逮捕された際、オニール氏は全米で時の人となり、2007年には本映画が作られ、そして今でも何かスパイ絡みのニュースがあると必ず各局こぞってオニール氏にコメントを求めるようです。

更に、ハンセン氏が現行犯逮捕されたのはバージニア州の我が家から車で10数分の所にあるTysons Corner近くの静かなFoxstone Parkだったということもあり、大変身近に感じながら鑑賞しました。全米を震撼させたスパイ事件の逮捕現場がDCからすぐ近くにあると思うと何だか観たくなりませんか？

【映画を語る会幹事より】

「ワシントンで気ままに映画を語ろう」のリレー連載は今回で最後となります。長い間ご愛読ありがとうございました。



出典: wikipedia
[https://en.wikipedia.org/wiki/Breach_\(film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Breach_(film))



実際に情報の受け渡しが行われ、現行犯逮捕となったFoxstone Park(撮影:渡り鳥)